



こうして…、人間が居なくなって暫くが経ちました…。

最初に、アイを見つけたのはトンボでした。トンボは草むらの蔭に宝石のように美しい色をしたクレヨンを見つけて拾い上げると、仲間のみんなに見せて回りました。

「—どうだい！、綺麗だろう！、オイラが拾ったんだ。オイラ、こいつがあんなに綺麗なものだから—と見ていたら、風が吹いてひっくり返って、人間が居なくなった跡に落っこちていやがった。へへー、いいだろ—！」

アイを拾って自慢しているのは仲間内で “夕焼け太郎” と呼ばれている一際、赤い色をしたトンボでした。

アイは、生まれて初めて舞う大空に…まるで自分が吸い込まれていくようで、楽しくて楽しくて仕方ありませんでした。

アイは…

『空こそが自分の住みたい本当の住み家なのだ！』と、思いました。そこで、アイは思わずトンボに尋ねました。

「太郎さん！どうしたらお空を飛べるようになるんですか？」  
その言葉に太郎はびっくりして、掴んでいるアイを落としそうになりました。

「なんだ、なんだ――！、おまえ喋れるのかよー。オイラもう少しでおまえのこと海の中へ落つことすとこだったぞー！」

しかし、海を知らないアイには、そんなことは平気なことでした。  
「ねえーってば、太郎さんー！」

「…なんだよ！藪から棒にー。それはだな…んー、つまり、…その、オイラも、オイラの父ちゃんや母ちゃんも、そのまた祖父ちゃんや祖母ちゃんも、ずっとずっと昔から空のことばかり考えてきたんだな。そしたらいつの間にか飛べるようになったー。…ってな訳さ。  
―ところで、お前は何でそんなに綺麗な色してるんだい？」

「えっ、僕？…僕って、本当に、キレイなの？」

「ハハハハハーツ、何言ってるんだい！キレイに決まってる。だって、空の色にそっくりじゃないか！」

「空の色に？…僕が？空の色に似てるの？でも…でも僕、分かんないよ！僕のどこがあの空と似ているの？―ねえー太郎さん、教えて下さい！僕のお父さんとお母さんは空なんですか？僕もいつか飛べるようになるんですかー！」

「そういう意味じゃないよー」

「えっ嘘！、僕のお父さんとお母さんは、空じゃないの……」

「あー、残念ながらそういうのはあり得ない話だね。キミは空に似ている、けど空じゃない。―だから空も飛べないのさ。

でも…、いいじゃないかそんなにキレイな色してるんだもの。…僕なんか、逆にキミのことが羨ましいよー！」

「嘘だ、そんなの！」

「嘘なもんか。だって僕らは直に死んじやうんだもの。キミなんか、絵になってずっと生きられるじゃないか―」

「死んじやう？…死んじやうって？―どうなるの」

「もう、二度と空を飛べなくなるってことさ。それだけじゃないよ、この世界から居なくなっちゃうんだ…」

「えっ、——本当に無くなるの？」

「土に還るのさ…」

「…」

「…キミには解らないと思うけど。生き物はみんなそういう運命なのさ…。キミなんか綺麗な絵になってずーっと生きられるんだもの、その方がずーっといいじゃないか、だろ？」

「…でもそれは、綺麗な絵にならなくちゃならないってことでしょ…？もし、綺麗な絵になれなかったらどうなっちゃうの？」

「ハハハハハ、ハハハハハ、その時はキミもお払い箱だね。いずれみんな土に還るのさ！、…結局同じだね。はははははっ——」

「土に還るって、——どうなっちゃうの？」

「しつこいな！、——オイラしつこい奴は嫌いなんだ。せいぜいお払い箱にならないように気をつけるんだね。じゃ——」  
そう言うとトンボは、アイを放り投げて飛んで行ってしまいました。

アイは、再び見知らぬ草むらへと落ちて行きました。

…こうしてアイは、

誰に気づかれることもなく、季節は巡って行きました。

——寒い風に凍える長い夜がやって来ました。アイは、深い眠りに包まれながら闇の中に溶けて行きました。



…やがて穏やかな、暖かな日の光が訪れるころにアイは目覚めて行きました。  
そこには…、美しい花びらが開き始めて行く光景がありました。